

「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者（敬称略）

作品名をクリックすると作品ページに移動します。

【文部科学大臣賞】 福井県立藤島高等学校 二年

久保田琉仁 九百三グラムの命をみつめる旅
（体験書籍『いつか貴い陽のしたで』辻聖郎・著）

【全国高等学校長協会賞】 石川県立金沢桜丘高等学校 二年

中野光志 死に関わる様々な意匠
（体験書籍『死に支度』瀬戸内寂聴・著）

【全国高等学校長協会賞】 佐賀県立佐賀西高等学校 二年

杉原翔太 「言葉」の海
（体験書籍『舟を編む』三浦しをん・著）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 北海道札幌南高等学校 二年

古館巨陽 きのう、隣人に語りかけたこと
（体験書籍『銃口』三浦綾子・著）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 栃木県

長龍佑 心を通わせる
（体験書籍『白い犬とワルツを』テリー・ケイ・著 兼武進・訳）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 兵庫県 関西学院高等部 三年

北嶋弥那子 推敲を重ねた「本作り」への夢
（体験書籍『花森安治の編集室』「暮しの手帖」ですごした日々」唐澤平吉・著）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 和歌山県

高尾美結 私たちが理解できないことについて
（体験書籍『レミング物語』アラン・アーキン・著 今江祥智、遠藤育枝・共訳）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 宮崎県立宮崎南高等学校 一年

河野滂花 知ろうとする努力
（体験書籍『跳びはねる思考』会話のできない自閉症の僕が考えていること）

東田直樹・著

「全国高校生読書体験記コンクール」について

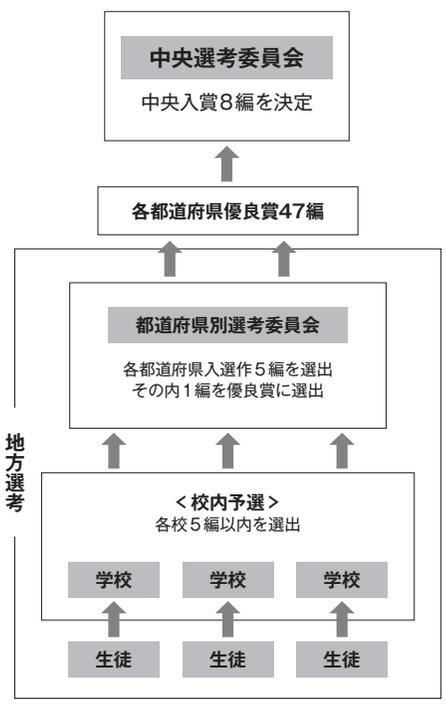
このコンクールは、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社などのご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」とともに毎年実施している事業で、多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのように行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

第38回の本年度は、全国47都道府県から438校の参加があり、応募作品は96,805編となりました。

【選考】

- ◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。
- ◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考委員会に送られました。
- ◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考委員会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。

【作品の応募と選考の流れ】



【賞】

中央入賞 8名

- ・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品
- ・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品
- ・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品
- *中央入賞者8名と付添い教師(各1名)を東京へ招待し、表彰します。

*中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞 39名 賞状・記念品

*優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選 188名 賞状・記念品

*入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央入賞者表彰式】

2019年1月28日(月) 東京・水道橋 東京ドームホテル

【中央選考委員(敬称略)】

- 辻原 登(作家)
- 穂村 弘(歌人)
- 角田光代(作家)
- 清原洋一(文部科学省初等中等教育局主任視学官)
- 小林正人(全国高等学校長協会)

【主催】

公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

【文部科学大臣賞】

九百三グラム の命をみつめる旅

福井県立藤島高等学校 二年

久保田 琉仁

今年の夏、私は十三年ぶりに沖繩、石垣島を訪れた。石垣島は、私が三歳まで暮らしていたところだ。空港に降り立った途端、南国独特の甘い風が吹き抜けた。空はどこまでも青く、海はエメラルドグリーンに輝いている。この島で生まれたことを誇らしく思えた。

私には、行きたい場所があった。それは、私が生まれた病院だ。そのきっかけを作ってくれたのは一冊の本だった。私と同じ、超低出生体重児の貴陽君という男の子

の本だ。両親から、私の誕生の時の話は聞いていたが、超未熟児だったという実感は私になかった。でも、貴陽君の本を読んで、自分の命を救ってくれた病院に行ってみたいと思うようになった。

貴陽君、七百六十四グラム、二十七週
私、九百三グラム、二十九週

グラムは出生時の体重、週は妊娠を維持できた期間である。出産までは、正常で約四十週といわれている。二人の差は、体重は百三十九グラム、期間は二週間だ。ほん

のわずかな違いだが、決定的に違うことがある。それは私は今、生きているということだ。現在、私は高校二年生、やせてはいるが平均的な体型になり、健康に暮らしている。しかし、貴陽君は、生後二ヶ月で亡くなっている。超低出生体重児には、たくさんさんの生命の危機がつきまとう。いろんな奇跡が重なり合い、私は今、生かされている。

日本最南端の総合病院が、私の生まれた所。そこにはNICU、新生児特定集中治

療室がある。早産、低出生体重、重い疾患のある新生児を集中的に管理、治療するところだ。私はここで、生まれた日から出産予定日だった日までの三ヶ月間を過ごした。当時の先生が現在も勤務されていて、私の訪問をととても喜んでくださった。そして、私の希望でNICUを特別に見せてもらうことができた。NICUの中に入れるのは、親族でも新生児の父母だけだ。NICUの窓の外側に小さなベランダがあり、私はそこから窓越しにNICUの中を見ることになった。

たくさんの保育器が並んでいた。その中にいるのは、本当に小さな子ばかりだ。私は、自分が生まれた時の写真を思い出していた。小さな体に隙間が無いくらいガーゼや管が貼られ、顔や手足はやせ細っている。身体の大きさはティッシュの箱を少し大きくしたくらいで、まるで胎児のような写真だ。NICUでは、そんな死と隣り合わせの新生児たちを二十四時間体制で診ている。そこで働いている先生や看護師さんたちの優しい笑みの下には、戦場で戦っている、強くてたくましい顔が見える気がした。

ふと横を見ると、初老の女性が私の左に

立つてNICUを見ていた。NICUの中には父母しか入れないため、祖父母などは、ここから赤ちゃんを見ることしかできない。祖母らしきその女性は涙を流していた。

「私も、この中に三ヶ月いたんですよ」

私は思わず声をかけた。女性は驚いた様子だったが、私が九百三グラムだったこと、今は健康でいることなど話していくうちに、安心したようだった。その女性は、十六年前の私の祖母だと思った。祖母は、この場所ですべて私と対面した。そして、今まで見たこともないような小さな赤ん坊を見て、衝撃と不安で涙を流した。これでは育たないだろうと、哀れんで流した涙だった。このNICUを見ることができると、小さなベランダは、赤ちゃんを思う家族の愛で満ちている。今は亡き私の祖母の思いも、確かにここにあったのだ。

この本も、両親の子供への愛であふれている。多くのページは、貴陽君が自分の気持ちを自分で語っているように書かれている。自分では痛いとか苦しいとか言えない我が子の代わりに、父親が子供の心を代弁しているのだ。その言葉を噛み締めながら、本を読んだ。私の両親も私が生まれた時、

貴陽君の父親と同じように悩み苦しみ心配してくれたからだ。

病院の先生にお礼を言って外に出ると、空は変わらず青かった。私は今生きている、そう実感した。普通の生活、普通の高校生、その普通って、本当はかけがえない尊いものなのだと気付いた。勉強が嫌だ、部活が面倒くさい、親がうるさい、なんて言えるだけ幸せなのだ。人間はいつかは死ぬ。当たり前のこのことを普段は全く忘れて生活している。死ぬまでの一日一日が、与えられた尊い時間なのだ。NICUで今を精一杯生きていく赤ちゃんを見ると、そう思わずにはいられない。

NICUを卒業して十六年。私の人生は、ここから始まった。そんな私だからこそ、これからの人生にどんな困難があろうとも立ち向かって進んでいける気がしている。

夏の盛り、病院の外では、羽化して一週間しか生きられないというせみたちが、命の限り鳴いていた。まるで、私に生き方のお手本を見せてくれてるかのよう。

体験書籍

『いつか貴い陽のしたで』辻聖郎・著

【全国高等学校長協会賞】

死に関わる様々な意匠

私は現在高校二年。サッカー部に所属し、ポジションはゴールキーパー。今年の県総体では、決勝まで勝ち進む。対戦相手は本田圭佑の母校、かつて全国制覇したこともある強豪星稜高校。残念ながら結果は、自軍のオウンゴールなどによって、優勝に終わった。

サッカーは相手のあるスポーツなので、自分たちがどれだけ練習しても、相手がそれ以上努力していれば、なかなか勝てない。あまつさえ、実力が上のチームが努力もし

ていたなら、こちらには運もやってはこない。日々の練習は勿論ハードで、つらい時間は長く思える。また、勝ってる試合は長く感じ、負ける時間は短い。時間というのは、伸びたり縮んだりする水飴のようだ。以前読んだ『モモ』に出てくる主人公の「ほんとうはいまの瞬間なんてぜんぜんなくて、あるのは過去と未来だけじゃないのかしら？」という言葉も、伸びた現在の裏返しの方かもしれない。

一読して、この本の題名が気になってき

た。「死に支度」の「死に」というのは連用形の名詞化というものらしいのだが、なんとなく違和感がある。もし「死」の支度ならば、「死ぬ支度」か、「死ぬる支度」となるのではないか。ついでに言えば、古文で「死ぬ」という動詞はナ変。他にも「あり」のラ変、「来」のカ変、「す」のサ変があるが、変格動詞はどれも実存的だ。でも、私には「死」は動詞には思えない。なぜなら、死ぬ直前までは実際に生きているのだし、死んでしまえばもう存在していないの

石川県立金沢桜丘高等学校 二年

中野光志

で、結局自分の死を知ることが不可能なのだから。つまり、一人称の死は存在しないということになる。

もとより、近い人の死は痛切なものだ。いわゆる二人称の死。私の父母はそれぞれ介護福祉の仕事に従事しており、入居者が亡くなった折の通夜や葬儀についての話題が、家族の会話の中にも上ることもしばしばある。ただ、その人たちは、会葬に参列しない私にとっては、未知の人たちであり、すなわち三人称の死を意味する。とするなら、存在するのは、やはり二人称の死のみということになる。

物語はまず、「老鷲」という章から始まる。五十二年間勤めた六十八歳のハンちゃんを筆頭に、スタッフ四人が突然筆者の元を辞めたいと言い出す。「私たちを養って下さるためにお仕事が減らせないので。どうか先生のお好きな革命をもう一度なさって、この際思いきって暮し方を変えて下さい」というのが理由。ハンちゃんのこの言葉には、何ら気負ったところはなく、芝居めいたところも微塵もない。だから却って、すこぶる切ない。

次の「春の革命」での六十六歳も年下の

モナとの面接でのやり取り、「初体験はいつ?」「高校二年生です」。その後の「臨終行儀」の章での二人の会話は、掛け合い漫才みたいに終始テンポ良く進む。「お早うございますなう」「お早うなう。昨夜は徹夜で四時に寝たから、起きないなう。食事いらさないなう」。だからこそ、その直後の一文が読者には突き刺さる。「自分の身の廻りに張りめぐらされた厚い因習の壁を、自分の素手で爪をはがして血みどろの手で掻き落し破り落そうとしたあの新しい女たちの、悲壮な戦いを思いおこしたら、百年後の日本の女たちの意識や行為の変り様を何と見るだろうか。筆者の懐手の匕首がほんの一瞬ざらりと光る。

一年で習った『徒然草』に、「死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり」という言葉があった。兼好法師は、死は前からばかり来ないで、いつの間にか、後ろに肉薄しているものだと言う。モモの「いまの瞬間なんてぜんぜんなくて、あるのは過去と未来だけ」というのとも妙に符合する。また、教科書に載っている齋藤史という歌人に、「君は死者われは老いたる生者にてその距離他よりいささか近き」という歌があ

った。老いが二人称の死者との距離を近くするものであるのなら、その点でも死は恐れる必要はないのかもしれない。齋藤さんには、「死の側より照明せよことにかがやきてひたくれなるの生ならずやも」という歌もある。死の側より照らすとは、死とは何かを知っていて、それを怖いとは思わないという意味であるのならば、筆者の瀬戸内寂聴さんはやはりその域に達している。二人称の死を体験したことのない私にとって、死の側から自分の生を照らすという実感は、正直まだ伴わない。だが、自らの死は存在しないという意味において、死が一種の暗喩のようなものであるなら、試合の敗戦から学ぶというのも、死の側から照らすのと似た支度になるのかもしれない。もしも死が、写真や絵画の陰のようであり、演奏のベースみたいなものであるなら、サッカーにおいては、ゴールキーパーがそうなのかなと思った。野球のキャッチャーとは違って、他のメンバーと同じ方を向いて、最後尾に立ちながらの。

体験書籍

『死に支度』瀬戸内寂聴・著

【全国高等学校長協会賞】

「言葉」の海

私にとって辞書は、分からない言葉を調べる単なる道具に過ぎなかった。しかし、『舟を編む』を読んでその考え方が変わった。

例えば、「犬」という言葉には「犬死に」に代表される「無駄」に相当する意味もある。また、「声」という言葉には、「秋の声」などに含まれる「季節、時期などが近づく気配」という意味もある。普段、何気なく使っている言葉にも、辞書を読むことで広がりや奥行きが感じられ、言葉が世界を繋

いでいるのだと思った。

私の好きな「食う」という言葉がある。辞書には所謂「食べる」の意味だけでなく、「その手は食わぬぞ」のように、好ましくない行為を自分の身に受けるという意味や、「年を食っている」つまり、年齢を重ねるといふ意味もある。年齢をその都度「食う」という捉え方が面白く、また、辞書の説明の文章も味のある表現だ。辞書は読むものだとつくづく思う。

『舟を編む』は、言葉に魅入られ、辞書の

編纂に打ち込む個性的な人々が、新しい国語辞典「大渡海」を作り上げていくストーリーだ。一冊の辞書を作り上げるまでの、編集者達の言葉への執着や情熱が描かれている。

今、私の机の上には、小学校一年生の時に買ってもらった辞書がある。知らない言葉があるたびに調べて、その言葉にマーカーを引いてきた。何度も調べたからか、めくる紙はもう真っ黒だ。『舟を編む』を読んで、ふと、その辞書を思い出し、久しぶ

佐賀県立佐賀西高等学校 二年

杉原翔太

りに開いてみることにした。ページをめく
るごとに、当時調べていた言葉達と出会い、
心なしか昔書いた自分の日記を読んでいる
かのような気持ちになった。

以前は、何気なく引いていた辞書だが、
『舟を編む』を読み終えてみると、辞書と
いう言葉の海の中に浮かぶ言葉一つ一つか
ら、編集者達の言葉への思いがにじみ出て
くるように感じた。

辞書は、「言葉」を言葉で説明する。編
集者は、そこにある既存の「言葉」に意味
を与えていくのであり、言葉を創るのでは
ない。言葉によって意味が付与され、その
意味によって「言葉」は生きる。日常の一
つ一つの「言葉」は、辞書にその生命が刻
まれている。何か、言い表せない感動を覚
える。

私は言葉に興味を持ち、身の回りの言葉
についても進んで意味を考えるようになった。
小説に出てくる単語や、先生の話の一
部、また、日常会話に出てくる何気ない言
葉にも奥行きが感じられるようになった。
「こと」「もの」そして「心情」を適切に言
い表しうるか否かで「言葉」を捉えていく
と、驚くことに、世界が生き生きとしてき

た。溢れる言葉の数々の意味は、私とそれ
らとの繋がりをより意識すること、輝き
を増していく。辞書は、やはり、読むもの
である。

最近では、電子辞書を使う機会が増えてき
たが、電子辞書では、打ち込めばすぐに意
味が出てくるので、紙の辞書を引く時の、
言葉の大海からその言葉を見つけ出したと
いう実感も湧きにくい。他の言葉について目
がいつてしまうような寄り道もない。

更に、紙の辞書は、引いた時にマーカー
を引くことで、足跡を残せるが、電子辞書
では不可能だ。辞書に残るマーカーを見て、
その「言葉」と関わった頃に思いを馳せる
こともある。時には、何度も調べる言葉も
ある。「辞書」は自分を映す鏡ともいえる。
言葉は、生きている。人間の生を支

えているものであり、時の推移に伴って変
化する。その言葉を「辞書」という作品に
書き留めるのは、計り知れない困難が付き
まとうに違いない。二千九百数十ページに
も及ぶ「大渡海」に載っている膨大な言葉
も、絶えずチェックが入れられている。
「下駄箱」はいまや死語となり、「靴箱」に
変わった。辞書は時代を映す鏡だ。その鏡

の向こうには、松本先生や馬締のような、
言葉に直に向き合う人の姿がある。時代の
先端を行くのもなく、名声や富を求め
るでもない。ただ、言葉への限らない拘り
が、辞書という形に描き出されているのだ。

私は、まだ将来の夢が決まってい
ない。しかし、言葉に情熱を捧げる『舟を編む』
の登場人物を見てみると、胸が熱くなる。
私自身自分の夢を持ち、それに情熱を傾け
て突き進もうと思う。

辞書を読む：紙媒体の辞書を手元に置き、
「言葉」の世界を楽しみ、味わっていき
たい。ひとつの言葉を定義づける表現、そこ
に行きつくまでに、様々な言葉との格闘が
あることを知って、私の言葉の世界は広が
っていく。書き言葉であれ、話し言葉であ
れ、相手の意図をきちんと受け止め、自分
の考えも同時に伝える。辞書を支えに、豊
かな、そして、生きた言葉を用いたい。「言
葉」は、単なる道具ではない。私を形造る
ものである。

体験書籍

『舟を編む』三浦しをん・著

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

きのう、隣人に語りかけたこと

北海道札幌南高等学校 二年

古館日陽

以前住んでいた家の一室は、本の部屋と呼ばれていた。そこは壁一面を本棚が覆っていて、なかに本がぎっしりつまっていた。本が音を吸収していたのか、静かな部屋だった。いつも耳の奥がキーンとしていた。その静けさを求めているのかもしれない。その部屋に入り浸っては本を読んでいた。初めのうちは手の届く本から選んでいた。そのうちに本を買い、集め、並べ眺める楽しみを知った。手の届かない棚の高いところの本は難解で退屈な本に違いないと

思いこんでいた。

六年ほど前の、ある夜のことだった。どこから大きな椅子を引っ張りだして本棚の前に据えた記憶がある。目標は、本棚の最上段。わずか十cm×二十cmの棚めがけて椅子の上で背伸びした。折り重なるように積まれた文庫本。心地よい震えが全身に訪れた。宮沢賢治、松谷みよ子、司馬遼太郎……。一度は読んでみたいと思いつながらなかなか縁のなかつた本でいっぱいだった。戦利品を落さぬように慎重に下界へ戻っ

た私は、いちばん先に読む本を決める必要があった。楽しみは最後にとっておきたかったので、『銀河鉄道の夜』とか『世に棲む日』といった作品は選ばなかった。床に本を広げて一冊一冊吟味していた手を、ある本が止めた。三浦綾子さんの『銃口』。手にとることはもちろん、見たことも聞いたこともなかった。三浦綾子さんのことも、このときに知った。そしてなにより、この本は群を抜いて、重厚だった。当時、厚い本にはそれなりの読み応えがあると信じ

ていた私は、一も二もなくその本を最初のパートナーに決めた。

本にここまで引きこまれたのは、このときがはじめてだった。続きが気になり少しでも手持ち無沙汰だと思ったら、たとえそれがほんの二、三分でもページを繰って読みふけた。主人公に自己を投影して喜び、怒り、悲しみ、先の展開を思って心臓の鼓動を速めた。上下巻構成でそれぞれ厚い本だったのにたった一週間で読み終えてしまった。それでも期待していた読み応えは普通の本の優に三倍はあった。

ほどなくしてもう一度読みたくなかった。どうせ二〜三回も読めば飽きてしまうだろうなんて思っていたのに、気がつけばもう六年も毎年のように読み返していた。初めのうちは単純に物語の展開を楽しむのが目的だった。そのうちに登場人物の台詞が自然と思いつけるくらい読み返しても、つまらないとは思わなかった。でも何を求めて『銃口』を読んでいるのか、それがわからなかった。

そのときも何の気なく読んでいた。それは小さな違和感だった。「同じだよ、竜太。自分がこんなに弱い人間であったかと、

何度自分に愛想が尽きたことか。しかしね竜太、自分にとって最も大事なこの自分を自分が投げ出したら、いったい誰が拾ってくれるんだ。自分を人間らしくあらしめるのは、この自分しかないんだよ」。何度も読み返した場面のはずなのにはじめて読んだような感覚。これまで感じたことのない強いメッセージを受けとった気がした。どうして今まで気づかなかったのだろう。とっさにそう思った。次の瞬間には疑問が興奮へと変わった。気づかなかったわけじゃない、気づけるようになったのだ、と。

この文はおそらくこれまで心に響いてこなかったのだろう。でも今は違う。心が、共鳴していた。それは心が変化したから、たぶんそう。いつのまにか『銃口』が心の動きを測る「ものさし」になっていた。単に中身を楽しむための読書が、無意識の自己を意識する喜びへと変わった。これが私の読書観を変えた。

それまでは物語性を重視していた。基準は、おもしろいかどうかだった。でも今、読書はそれだけじゃない。本を通して内面の変化に敏感になるとともに自己の新たな気づきを誰かと共有することだと思ってい

る。そして読者は著者の見えざるメッセージを受けとることで著者と、作品と飽くなき対話を繰り返しているのではないか。『銃口』を読んでいるとそう思えてくる。むしろその対話を渴望して今日もまた『銃口』を読むのだろう。

物語で主人公は、小学生のころに強い影響を受けた恩師に憧れる。志した小学校教諭になるといふ夢をかなえてからも恩師のようにありたいと願う彼は、あるときの恩師への手紙で道を歩いていてふっと恩師に語りかけたくなる時があると告げる。はじめて読んだときは「道を歩いていてふつとなんてそんなことがあるもんか」と思った。でも、それは違った。意識して道を歩くと意外にも小さな変化や気になることはたくさんあった。当分はそれを自分に語りかけることで満足したい。いつかそんなことを語りかけたくなる人に出会えると信じて。

体験書籍

『銃口』三浦綾子・著

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

心を通わせる

私の祖母はどんな気持ちだっただろうか。悲しみ、怒り、無力感……。テリー・ケイ・著、『白い犬とワルツを』を読み、祖母の気持ちを考えずにはいられない。最愛の妻に先立たれ、自らも病に侵された老人サムは、「寂しさ」や「生活の不自由さ」に直面する。祖母の境遇はどことなく似ている。私が生まれる何年も前に祖父が亡くなり、私が中学二年生の頃、祖母は認知症と診断された。

私が幼い頃から両親は共働きをしていて、家事の多くを祖母がこなしていた。私が腹

を空かして帰ると、おにぎりや炒飯などのおやつを用意してくれた。風呂掃除や洗濯など何事も一生懸命で手際の良い、尊敬すべき祖母であった。最初は少し違和感を感じた程度であった。風呂に入ろうとすると異臭がする。祖母が洗剤を間違えて掃除をしたようだ。こんなことは今まで無かったので、正直驚いた。翌日、また違う洗剤を使って掃除をしている。「俺が掃除するからいいよ」と言っても聞いてくれない。ある日、部活から帰るとテーブルの上におにぎりが用意されていた。腹を空かせていた

私はそれを手に取り、一口かぶりついた。何か違和感がする。かじった跡を見るとそこには無数の髪の毛が。背筋が凍った。すぐさま吐き出し、祖母の身に異変が起きていることを確信した。

本文中に、サムがビスケットを焼こうとして失敗する場面がある。妻コウラには簡単にできることが、できない自分に苛立ち、サムの悲しみは一層増した。この時、今まで難なくこなしていた家事ができなくなってしまう不甲斐なさに、苛立ち、泣くようになった祖母を思い出した。両親や、何

栃木県 小山工業高等専門学校 三年

長 龍佑

が起きているのか分からない私や妹、弟は苛立つことが多くなっていた。仕方ないのかも知れないが、祖母を考える度に辛かった。心を刃物で切り裂かれている感覚だった。私はついきつく当たってしまった、その度以後悔していた。

それからというもの、祖母の症状は日に日に悪化していった。夜中に餓い猫を探しに行ったまま行方不明になり、家族で探しに行ったり、自分がどこにいるのか分からなくなると、家の中で「帰りたい！」と泣き叫んだり。到底理解できないことばかりであった。しかし、私が心配していたのはむしろ、両親の方であった。常に祖母のことを気にかけていた両親はいつも疲れ切っている様子だった。肉体的にも精神的にも追い詰められ、家庭内のコミュニケーションも少なくなっていた。家族が崩壊していくのをただただ呆然と見ることしかできなかった。

そんな生活が続いたある日、家族会議が開かれた。その内容は、「祖母にデイサービスに通ってもらおう」ということであった。正直、介護を続けるのが困難であることが大きな要因であったが、何よりも話し

相手のような存在が必要だと考えたのだろう。当初は祖母も乗り気ではなく、それどころか拒んでいた。デイサービスの職員の方が来てくれても、頑固な祖母は一向に動こうとせず、泣いてしまいう日もあった。しかし月日が経つにつれ、すんなりと通えるようになった。自分と近い年齢の人々との交流は祖母にとって間違いなく有意義なものであったと思う。今では老人ホームに入り、日々の生活をそこで送っている。専門の職員の方々がいて、話し相手がい……。

家族との交流こそ減ったものの、祖母にとって一番良い選択だったのかもしれない。先日、私は祖母と会話をした。私は学校での出来事を中心に色々と話しかけた。部活動のバスケットボールの試合で活躍したこと、テストで満点を取ったこと、将来のこと。もちろん祖母は誰と話しているのかすら分かっていないが、終始笑顔の祖母を見て安心した。祖母も昔の友人のこと、空襲に巻き込まれたこと。昔のことをよく覚えていて沢山話してくれた。自然と私も笑顔になった。しかしそれと同時に過去の自分を猛省した。

噛み合うことのない会話に腹が立ち、適

当に相槌を打ち、話を聞いている振りをしたこと。何回同じことを言おうと全く覚えられない祖母にきつく当たったこと。泣き叫ぶ祖母に「うるせえ！」と言い放ったこと。

周囲の人が、白い犬が見えるというサムをボケのせいだと言い、相手にしていなかったことをサムが見抜いていたように、祖母は私が話を適当に聞き流しているのも気付いていたのだろう。そしてサムのように気付かない「振り」をしていたのだろう。私は胸が苦しく、締めつけられるような感覚を覚えた。

祖母と会話をしたあの日の笑顔は私の胸に深く刻まれた。話の内容よりも、相手と心を通わせることが大切なのだ。頭では分かっているつもりでも、怠っていた。とても大切なことに気付かせてくれた。この本との出会いは一生の宝となるだろう。相手の気持ちを思いやることこそが、お互いの幸せに繋がる。次は何を話そうかな。会いに行くね、ばあちゃん。

体験書籍

『白い犬とワルツを』テリー・ケイ・著

兼武 進・訳

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

推敲を重ねた「本作り」への夢

兵庫県 関西学院高等部 三年

北嶋弥那子

小学校四年の私は自分が嫌いだった。劣等感だらけの外見、いじられキャラで学校に行くのが嫌だった。そんな私に母は一冊の本を渡した。『ニコ☆ブチ』（新潮社）には夢が詰まっていた。同い年のモデルやワクワクする洋服で溢れる雑誌は世界を変えた。何事にも前向きになり親友もできた。人生を変えてくれた雑誌に恩返ししたいと六年時にお手製の『ニコ☆ブチ』を作成して送ると、編集部の方々から温かいメッセージが返ってきた。

中学生になると背伸びして『Seventeen』（集英社）を購入した。二〇一五年二月号

の特集「STスタッフのお仕事大研究」で編集者という仕事を知った。「自分が考えた企画がモデルやプロのカメラマンによってページになるのが編集者の醍醐味」と語る編集部・門名美苗氏のインタビューを繰り返し読んだ。常に面白いこと、高校生が興味を持っていることのリサーチを欠かさない姿に憧れた。ライター、カメラマンと協力して読者に夢を届ける仕事に魅了され、本を通して子どもたちに夢を届ける編集者を夢見るようになった。

高校生になり、将来の職業として編集者を考える私に負の情報がたくさん入ってくる

る。一つは出版不況に伴う出版関連企業の倒産。書籍販売店の負債総額は一五億六三〇〇万円。何とこの二十年で一万店近い書店が閉店していた。二つ目は夢を打ち明けた友人の「編集者ってブラックそうだよね。眠れなくてお肌ボロボロになりそう」の一言。三つ目は永江朗氏が「返品をさけるために、出版社は次の本をつくる。つまり本づくりが資金繰りの道具になってしまった。こうして市場は縮小しているのに発行点数は増えるという奇妙な状態」（『小さな出版社のつくり方』）「上司からいわれているのは、点数を絞ってでも、確実に売れ

る本を」(『本の現場 本はどう生まれ、だれに読まれているか』と指摘する状況。先の見えない出版業界、編集者の疲弊、読者のためでなく金になる本ばかり世に出る現状などに、私は絶望さえ感じ始めた。進路に暗中模索する今年の初夏、『花森安治の編集室』に巡り合った。伝説の編集者、花森安治の言葉には雑誌づくりに生涯をかける重みがあった。かつてはこんな編集者がいて現在の出版界の先駆けとして書籍の面白さ、読書の楽しさを残してくれていた。『暮しの手帖』の文章の基調にあったのは、読者への気くばりです。「いつもじぶんの手を地につけて、じぶんの手で現実をつかまえる。手を低くしているんだ。そうすると現実はずせんと見えてくる。手を低くしていると、眼はずせんと遠くが見えてくるものなんだ。遠くが見えるということは、眼が高くなったということだ」。読者が読みやすいように文章は話すように書け、本物の情報を集めるには眼は高く手は低くしている、と、花森安治はとことん読者に寄り添う。さらに次のような矜持には勇気づけられる。「この雑誌は、広告をのせていません。そのために、どんな圧力も

感じないでやってこられた」。読者に真実を届けるために他の力には頼らない波打ち際に立つ一本の杭であれと、彼は広告という権力と一線を画し続けた。その覚悟に憧れた。出版業界に限らず世の中には陰の部分がまだ残っているのだろう。しかし、編集者を目指す志を妨げる理由にはならない。私はその陰に怯え、不安に向き合う覚悟を持って逃避していたのだ。今も暮しの手帖社は広告収入に頼らず雑誌『暮しの手帖』を刊行している。

今夏、大阪大学附属図書館に足を運び、その雑誌を手にした。高校生でも十二分に楽しめた上に読み応えもあった。武田砂鉄氏のコラム「今日拾った言葉たち」(第四世紀九三三・二〇一八年三月)は、米軍ヘリコプターの窓落下事故への政府の対応を「国民ではなく米軍に寄り添っている」と批判していた。「自転車、あぶない」(第四世紀九四四・二〇一八年五月)では、出版社のスポンサーにもなり得る自転車メーカーの落とし穴をグラフとともに伝えている。出版業界に商業主義が生んだ多くの闇があるなら、編集者になってその闇に立ち向かえばいい。締め切り前に朝まで編集作業を

するのは待つてくれている読者のため。気がつけば私は「編集者になりたい」、再びそう思い始めていた。

最近では朝日新聞社のA I記者「おーとりい」が甲子園の記事を書いたなど、A Iが新聞社やテレビ局で活用され始めた。今後は出版業界にも進出し、人間の編集者を脅かすかも知れない。でも私の心は変わらない。脅威となる存在、問題を解決することも含めて編集者になることを改めて決意したのでから。

今夏、六年生の時に温かいメッセージを送ってくださった『ニコ☆ブチ』編集部の方に神楽坂まで会いに行った。憧れの編集者であるその方は、六年前のあの少女のことを覚えていてくださった。夢に満ちた編集の仕事の楽しさをいろいろ教えてくださった後、決意をお伝えするとうれしい言葉が返ってきた。

「子どもたちに夢を届ける本を、いつか一緒に作りましょう！」

体験書籍『花森安治の編集室』

『暮しの手帖』ですごした日々』

唐澤平吉・著

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

私たちが理解できないことについて

和歌山県 智辯学園和歌山高等学校 二年

高尾美結

給食に出た魚を残そうとしたことがある。理由は忘れた。箸を置いてじっとする私に、先生が笑みを浮かべて寄ってきて、いかにも小学校の教師らしい優しい声を出す。残したら、魚さんが可哀想だから、食べて。やはりそうなるかと観念して私は再び箸を持った。残したら、魚さんが、可哀想だから。頭に何かもやっとしたものが過つたが、魚さんが不味くなりそうな予感がして考えるのを止めた。それなのにあの先生の言葉が今でも頭を離れないのは何故だろう。次にそれと再会したのは確か中学生の時

だ。テレビ番組で、水を得る為に学校へ通うことができないという少女が特集されていた。番組の終盤に、偉い人みたいな肩書きや衣装を纏ったおじさんが言った。日本の子供たちは、彼女の為にもより勉学に励むべきである。違和感が甦る。あの時よりもっと鋭く、鮮烈に。果たして私が勉学に励めば彼女は救われるのか。あの時だって、私が食べたから魚さんの「可哀想」は消えて無くなったのか。その違和感は、今でもふとした瞬間に現れては私に疑問を託していくのだ。

『レミング物語』を読んだ。不思議な話だった。舞台はレミング（ネズミの一種らしい）の世界で、彼らは大移動を目前に控えている。崖から海に飛び込んで西へと向かう予定だ。その中の主人公は、自分たちは泳いだ経験が無いということに気付き、疑問を持つ。他のレミングたちは根拠なく、純粹に、本能的に、泳いで「西」に辿りつくことを信じている。読みながら、自分がレミングの世界と私の生きている世界を完全に重ね合わせていることに気付いた。主人公と私がみつめて

いる世界は同じだった。この先に、希望に満ちた幸せな未来があると皆が信じている世界。血も涙も流れない未来が、魚が食われても「可哀想」じゃない未来が、少女が学校に行ける未来が、来ると皆が信じている。根拠なく、純粹に、本能的に。しかし私は、その未来を体験したことがない。一体誰が、いつ、その「今」を経験したというのか。さしずめこの物語で登場する「西」は人が目指す明るい未来、そして「海」はそこに到達する為の過程もしくは試練といったところか。私には、いや私たちには皆が何故「海」を超えて「西」へと辿りつくことを信じられるのか理解できない。誰一人、「西」の端っこだって見たことも無いくせに。

『レミング物語』に、こんなシーンがある。自分が泳げるのか不安になった主人公が、池で検証しようとするのだ。しかし彼は水の不気味さに恐れをなして諦めてしまう。このシーンを読んで、私ははたと気付いた。そうか、誰も過程や試練なんでものは受け入れたくないんだ。特に巣穴でのんびり暮らしているレミングや、安全地帯で平和に生きられる私たちにとっては。だから泳

げるかなんて考えたくない、どうすれば明るい未来が来るか知らないで良い。たいたい「その時」が来れば辿りつけると信じたい。たとえ自分が何もしなくなつて、「その時」が来れば。何だか面白かつた。あの先生にとつては、私が魚を食べ終えた時が「その時」だったのだ。あのおじさんにとつては、日本の子供が勉学に励む時。先生やおじさんが何もしなくなつて「その時」は訪れて、魚は成仏し、少女は救われる。あの人たちはそう信じている。とても甘くて面白い思考回路だと思つた、そして少し可愛らしくもあつた。多分、優しいのだ。たまたま「幸せ」に暮らせる人間は優しく、罪悪感を持つことができる。例えば調理済みの魚さんや、貧困に苦しむ少女

に対しても。よくある途上国の生活に迫つた番組や記事を目にした時、私たちに叩きつけられているものは何か。

君は彼らよりもずっと良い生活をしている。金もある。家も食料も。戦争や死や飢餓や恐怖と無縁、だからこそ生きている実感のない人生。だから彼らの分まで頑張れ殺した命の分は食べろ。それが彼らへの祈りと感謝になると思ひ込んで、この罪悪感

を消してくれ。これだ。私たちも私たちでもっと欲しいを止めてくれる何かを求めてこれを眺める。物欲や幸せの追求は、例えば同情とか感動とか、そういうちゃちなもので止められることを、皆、よく分かっている。

さて、『レミング物語』ではレミングたちが遂に「その時」を迎えた。レミングの大群は我を忘れて仲間を踏み潰しながら崖の下の死の場所に向かう。皆がそこに飛び込んで、しんとした崖に主人公一人が残つた。さあ人間はどうなるだろう。私たちは泳げるか。辿りつけるのか。ただ確かなこと、私と主人公の決定的な違いは、「その時」私は間違いなく「海」に落ちている、ということなのだ。

考えよう。こんなに生産性の無いありきたりなことについて、考える暇もなく充実した人生を目指して、私たちの「海」に沈み、その水の冷たさに凍える瞬間まで。

体験書籍

『レミング物語』アラン・アーキン・著

今江祥智、遠藤育枝・共訳

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

知ろうと努力

宮崎県立宮崎南高等学校 一年

河野滂花

自閉症とは、先天的な脳機能障がいのことだ。人とコミュニケーションをとるのが難しかったり言葉の遅れがあったりする。日本でも世界でも発達障がいをもっている人は多く、この本の著者である東田直樹さんもその一人だ。東田直樹さんは、人と会話することはできないが、文章を書くことはできる。これは私にとっても驚くべきことだった。

私の兄は、東田直樹さんと同じ自閉症だ。会話がときどき通じなかったり同じ言葉を繰り返して発したりする。本には「僕の口から出る言葉は、奇声や雄叫び、意味のないひとりごとです。普段している『こだわり

行動』や跳びはねる姿からは、僕がこんな文章を書くとは、誰にも想像できないでしょう」と書いてある。私は、幼い頃から兄のようなスムーズに会話や文章を作ることができない姿を見てきたので、この本の最初から驚きと戸惑いを隠せなかった。また、自閉症という障がいをもっているでも自分の考えや思いがはっきりと存在することに驚くと同時に、自分の思いを上手に伝えることのできない兄にも伝えたいことやいろいろな思いがあることに気づかされた。

兄は小さい頃、周りの人とコミュニケーションをとるのが苦手な人などには目も合わせられないほどだった。兄の周

りには自閉症を理解できていない人達が多く、愛想の悪い子や変わっている子と思われることも少なくなかったそうだ。けれども根気強く子育てを続けてきた母の努力のいかいもあってか、中学生になる頃には自分の気持ちをきちんと伝えるようになり、社会人になった今では簡単な会話ならできるようになった。私は兄のことも自閉症のことも理解しているつもりでいたが、東田さんのエッセイを読んで新たに気づかされることの方がはるかに多かった。もしかしたら兄はいつも笑顔で楽しそうにしているように見えるが辛さや悲しさを口に出せずに、悔しい思いをしていたのではないかと思ひ、

とつても切ない気持ちになった。

東田さんにも「こだわり行動」があるように、兄にも「こだわり行動」がある。例えば、マンガなどは巻数ごとではなく独自の並べ方で並べる、テレビで夕方にある好きな番組は必ず見るなどだ。また、ストロークを持っていたら落ちつくらしくずっと持っている。小さい頃はどんな場面でも持っていないとパニックを起こしていたが、今では外出時には持っていかないというルールが守れるようになっていく。日々私達と同じように成長しているのだ。さらに、本を読んでいて共感したのは『挨拶』の所だ。私は今までずっと挨拶しても一回では返さない兄のことを、気づいていないか、気づいてもどうすればいいのか心の中で考えているのだと思っていた。けれどこの本を読んで、目に入る物全てが話しかけてくる様に見えるのと知った。兄の目に飛びこんでくる全ての物が一気に喋りかけてくるというのとはどのような感じなのだろう。自閉症といっても様々なタイプがあるので個人差はあるがこの本を読みこのようなことを考えているのか、と知れてもつと兄に近づけた気がしてとても嬉しかった。

自閉症は今だからこそ理解を深めようという活動があるが、広まっていけないのが事実だ。現に私の友達でも自閉症を理解している人は一人もいなかった。でもそれは当然だと思う。周りにそのような人がいるということを知る機会がないからだ。私も兄が自閉症でなければ理解できないことだと思ふ。だからこそ、まだ知らない人達に少しでも理解してほしいと思ふ。

私は小さい頃から、普通ではない兄と接してきて普通ではないということが本人だけでなくそれを支える家族にもたくさん影響を与えることを感じていた。その経験から私は特別支援学校の先生になりたいという夢を持つようになった。そして、この本を読んでより一層なりたいたいという思いが強くなった。障がいをもった子供と接するのはとても難しいと思う。なぜなら、普通の子供は普段の生活の中から自然にたくさんのお話を学んでいくが、障がいをもっている子供はそれが難しいからだ。けれど、すぐにはできないからこそ少しずつ成長していき、できるようになったときに達成感とやりがいを感じることもできると思う。その夢を叶えるためにも、今できることは

何かを考えながら有意義な生活を過ごしていきたい。

東田さんもこの本で伝えてるように、障がい者も健常者も関係なく誰しも自分の世界をもっている。その世界が皆に理解されるには限らないし、誰でも本当の自分を分かってもらえないこともある。だが自閉症の人に比べたら伝えようと努力していないだけで、理解してもらえない機会を失っているかもしれない。

そして、理解するということが難しいことだと分かっているからこそ私は多くの人に、自閉症のことをしっかり知ってほしい。東田さんの言うように知ってもらうことで生きやすくなると思うのは、自閉症者を見るみんなのまなざしが変わってくることを期待しているからだ。人として、どんな障がいをもっていたとしても、人と違ったとしてもその人のことを知ろうとする努力を怠らない人でありたいと私は思う。

体験書籍

『跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること』 東田直樹・著

ティツシユの箱を少し大きくしたくらい

作家 辻原登

『九百三グラムの命をみつめる旅』（久保田琉仁）。我々はみな生まれて、死んで行くが、誕生と死

については遂に把握できないまま地上から消えて、また別の生へと転生する。久保田君の作品にはそのことが、彼自身の稀有な経験から思考を巡らして、おそらく宗教的高みにまで届くほどの表現となつて結実している。「ティツシユの箱を少し大きくしたくらい」の生命と、「夏の盛り、命の限り鳴いている蟬たち」が響き合う世界が書き留められた。

『死に関わる様々な意匠』（中野光志）。

言葉としての「死」と経験としての「死」の考察には目を瞠るものがある。まさにタイトルに相応しい意匠の展開で、「だが、自らの死は存在しないという意味において、死が一種の暗喩のようなものであるなら」からラストに至るパラグラフはウィットに富んでいる。

『言葉』の海（杉原翔太）。

『言葉』を捉えていくと世界が生き生きとしてきた」とある。紙の辞書は重い。辞書を引く時、「言葉の大海からその言葉を見つけ出したという実感」ともある。それは自己発見でもあるだろう。小学校一年生の時に買ってもらった辞書は、まる

で昔書いた自分の日記を読むようだという、航海者杉原君には豊かな「表現」の海が待っている。

『きのう、隣人に語りかけたこと』（古館旦陽）。

まさに読書体験の真髄を語り尽くした、といった体の文章である。古館君は三浦綾子の『銃口』を「もう六年も毎年のように読み返して」いる。「作品」と飽くなき対話を続けることは、読み手だけでなく、「作品」そのものを革新していくことだ。私たちはそのようにして「古典」を生み出してきた。

『心を通わせる』（長龍佑）。

『認知症』という言葉に私（辻原）はいつも違和感を覚える。こういう言葉は一体いつ、どのようにして作られ、定着していくのだろう。長君はこのことについて書いているわけではないが、間接的に、こういう命名とレッテル貼りの異様さに気がかぬ「振り」をしている私たちの「振り」に、祖母との交流を通して照明を当てている。

『推敲を重ねた「本作り」への夢』（北嶋弥那子）。

「本」が売れない、「本」が読まれない。しかし、「本」を作る「編集者」を夢見る若者は多い。増え続けているようにさえみえる。しかし、北嶋さんは、地に足を着けて、着実に「編集者」への夢

を追う。その原点を「花森安治」に見出したところが素晴らしい。

『私たちが理解できないことについて』（高尾美結）。

世に蔓延る「おためごかし」の言説・風潮への鋭い批判の矢が放たれる。「給食に出た魚を残そうとしたことがある」という冒頭から、具体と抽象が歯車のように噛み合つて、『レミング物語』の深い読み込みを交えた論の展開は秀逸である。文体のシニカルでアイロニカルなトーンは、批評の矢が他者と世界にだけでなく、自らにも向けられているから、諧謔へと転じて、読み応えにおいて候補作中、随一である。

『知ろうとする努力』（河野澁花）。

「自閉症とは、先天的な脳機能障がいのことだ。」冒頭の文章である。そして、河野さんのお兄さんはその自閉症者なのだ。「目に飛びこんでくる全ての物が一気に喋りかけてくるというのはどのような感じなのだろう」。お兄さんは、深遠な世界を潜めた一冊の本なのだ、この閉じられた本を開く時、豊かな共生の世界が目の前に広がる。お母さんの献身も忘れず書き留められている。

考えることをやめないために

歌人

穂村弘

『九百三グラムの命をみつめる旅』の「九百三グラム」とは「超低出生体重児」として生まれた作者の出生時の体重である。体験書籍『いつか貴い陽のしたで』の中に出てくる貴陽君との体重差百三十九グラムが生死を分けた。その命の重みを見つめ直すために作者は自らが生まれた病院を訪ねる。動機に説得力がある。生まれた時のことは誰も記憶になく、それは振り返る形でしか確認できないからだ。読書と過去の体験と現在の行動が一つに結晶化した優れた作品だ。

『死に関わる様々な意匠』は創造性に富んだ文章だ。タイトルの通り、死を巡るさまざまな文章が引用されるのだが連想の流れに独特のセンスを感じる。その最後に、死をサッカーのゴールキーパーとしての自分自身に結びつけた着地も面白い。「野球のキャッチャーとは違って、他のメンバーと同じ方を見て、最後尾に立ちながらの」という結語になるほど思った。

『推敲を重ねた「本作り」への夢』には、編集者になりたいという「夢」が描かれている。漠然とした希望ではなく、リサーチを重ねて、時には「負の情報」に絶望しながらも、少しずつ近づこうとする。「夢」の現実化に向けての一步一步が読み手の心を惹きつける。憧れの編集者に貫った「子

どもたちに夢を届ける本を、いつか一緒に作りましょう！」という言葉に、どこまでも繋がる「夢」の連鎖を思う。

『私たちが理解できないことについて』のテーマは重い。この文章の中で、作者は種としての人類の問題について考えようとしている。「果たして私が勉学に励めば彼女は救われるのか。あの時だって、私が食べたから魚さんの「可哀想」は消えて無くなったのか」。ここには、その問題に関して大人たちが口にする（と）りあえずの「正解」に対する強い違和感が提示されている。一見反論の余地のなさそうな（と）りあえずの「正解」こそが、最悪の思考停止装置になっていることに気づかされる。

『心を通わせる』は「私の祖母はどんな気持ちだっただろうか」という一文で始まる。近い境遇にある作中人物の姿を通じて、作者は自らを語れなくなってしまった祖母の気持ちを考えているのだ。読書体験から現実の関係性の捉え直しが始まる。それによって、過ぎ去った時間の意味が変わることを教えられた。おにぎりの中から無数の髪の毛が出てくる、といったエピソードにも臨場感がある。

『きのう、隣人に語りかけたこと』には、一冊の本を毎年のように何度も読み返すことの意味が描

かれている。同じ本でも読み手の側が成長していれば、それは新しい本になる。逆の見方をすれば、その本は自分自身の変化を測る「ものさし」なのだ。「本が音を吸収していたのか、静かな部屋だった」「この本（引用者註：『銃口』のこと）は群を抜いて、重厚だった」などの細部の表現も魅力的だ。

『言葉』の海』には、辞書を引くのではなく「辞書を読む」ことについての思考が記されている。「犬」「声」「食う」などの例が挙げられているのだが、それを読んでいくうちに、言葉が生き物のように感じられてくる。言葉は「私」のための単なる道具ではなく、その命を通して生の主体としての「私」そのものを「形造るものである」、という見解には説得力がある。

『知ろうとする努力』には、一冊の本を読むことで、身近な存在である兄についての見方が変化した体験が描かれている。注目したのは、その過程において作者が何度も驚いているということだ。「驚くべきことだった」「驚きと戸惑いを隠せなかった」「驚くと同時に」……、衝撃を通して他者という世界の扉が少しずつ開かれてゆく。「知ろうとする努力」とは自らの世界像の更新なのだ。

今のあなたが発揮させる本の力

作家
角田光代

言いたくなってしまう。

『きのう、隣人に語りかけたこと』の古館且陽さんが書いた体験は、私にもある。十代のときにまったくわからなかった本が、三十代になって震えるほどの感動を与えてくれることがある。それを「心の動きを測る『ものさし』」と表現した古館さんの言葉は、じつに的確だと思う。ものさしはひとつでなくてもよくて、たくさんあればたくさんあったほうが、よりいろんな角度から自分をはかることができる。ぜひこれからもたくさん本を読んでください。

自分の家族に起きたことや、過去の自分を書くことは、なかなかむずかしい。長龍佑さんは、むずかしいそのことを、きちんとした距離を持って、冷静に描いている。本に描かれた老人を通して、よく見知った祖母と長さんはもう一度出会っている。そのことに私は素直に感動した。

『推敲を重ねた「本作り」への夢』に私は感嘆した。小学生のときに雑誌に出会い、その雑誌から将来の目標を引き出し、その目標にまつわるインタビューや書籍をたくさん読んでいた北嶋弥那子さんの文章は、迷いがなくて力強い。出版不況にも触れながら、それでもなおかつ自分の夢を推敲する凜とした姿が、感想文から浮かび上がる。いつかいつしよに本を作りましょう！と私からも

高尾美結さんの『私たちが理解できないことについて』には、誠実な思考がある。食事に出た魚を残すと、なぜ魚はかわいそうなのか。学校にいけない第三国の子どものために、なぜ自分が勉強に励まなければならないのか。違和感を抱いて反発を覚えながらも、言葉にするのが難しい問題について、『レミング物語』に手を引かれるようにして考え、言葉にしていく。生産性がないとされることの、真の重要性についてもさりげなく触れられていて、その点もよかった。

河野滂花さんは、『跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること』を読んでおにいさんのことをわかるようになったのか、あるいは、おにいさんのことをわかりたくてこの本を読んだのか、わからないけれど、でも、『知ろうとする努力』という読書体験記には、河野さん自身の努力が描かれている。ひとつひとつ、書かれていることに納得させられた。

『言葉』の海』の杉原翔太さんは、電子辞書をごくふつうに使う世代でありながら、辞書好きという変わった若者だが、この読書体験記を読んでいると、そのことが本場に頼もしく思える。子どもものころに使っていた辞書を開いて、マーカーの

引かれた言葉を見て「自分の日記を読んでいるかのように」と書く、この感性がすばらしいと思う。『死に関わる様々な意匠』の中野光志さんの文章は、じつに独創的で、想像力にあふれていて、深く感心した。『死に支度』という本でなくとも、ほかの本でも、このような思考・考察体験はできたのではないかと思うけれど、そのことはとくに欠点ではない。私はこの読書体験記を読むことで、死について新鮮な角度から見ることができた。

九百三グラムで生まれた久保田琉仁さんは、七百六十四グラムで生まれ、亡くなった貴陽くんが父親が書いた本を読み、自分が生まれた石垣島の病院を訪ねる。石垣島の強い日射しと日陰のコントラストのように、背中合わせの死と生がある。NICUという病棟を私は知らなかったが、そこで、久保田さんは本当に貫いた体験をする。それが端整な文章で綴られている。久保田さんにとっても、見知らぬおばあさんにとっても忘れ得ぬだろう、短い出会いだ。この本を開かなければ、この瞬間はなかった。そう思うと、あらためて本力を思い知らされた気分である。

しなやかに生きる！

文部科学省
初等中等教育局主任視学官

清原洋一

今年の最終審査に残った作品、いずれも読書を通して物事を様々な角度から考え、自身の心や行動の微妙な変化にも気づき、巧みに表現していった。読み応えがあり、読むほどに心に響く、すばらしい作品でした。

文部科学大臣賞に輝いた久保田琉仁さんの作品は、超低出生体重児の貴陽君という男の子を綴った『いつか貴い陽のしたで』（辻聖郎・著）の読書をきっかけに、自身の命を救ってくれた病院を訪れ、そこでの貴重な体験や想いを巡らしている状況が伝わってきました。出生の地である石垣島、三ヶ月間保育器の中で過ごした病院を訪れ、その地を誇らしく思う気持ち、主治医だった先生との再会、病院のスタッフ、NICUの様子を見ていた新生児の祖母との出会い等と読書とを関連させながら、考えや心情の変化を豊かに表現していました。そして最後に、病院の外で命の限り鳴っているせみに、「私に生き方のお手本を見せてくれているかのように」と結んでいる心境の描写にも心を打たれました。

全国高等学校長協会賞に輝いた二人にも、感動しました。中野光志さんの作品は、『死に関わる様々な意匠』と題し、『死に支度』（瀬戸内寂聴・著）の読書をもとに、様々な考察と心の有り様が切々と伝わってきました。サッカー部ゴールキー

パーとして県総体準優勝というほどの実力の持ち主、サッカーから話が始まり、本のタイトルの意味の分析、ご両親の仕事の家庭での話題との関連づけなど、様々な角度から思考を巡らしていました。そして、締めにはサッカーの自分のポジションでの想い、文章構成にも驚かされました。

また、杉原翔太さんの作品は、『言葉の海』と題し、『舟を編む』（三浦しをん・著）の読書を通して、それまで単なる道具でしかなかった辞書に対する考えが一変、それだけではなく言葉に対する感受性が大きく変容し世界観までも変わった状況が表現されていました。小学生の時に使った辞書、知らない言葉に付けたマーカーも、ページをめくるごとに、当時調べていた言葉と出会い、自分の日記を読んでいるかのような気持ちに……。辞書の編集者達へ思いを馳せ、それだけではなく、今後の人生にも影響を及ぼすものでした。

一ツ橋文芸教育振興会賞に輝いた五作品も、心に自然に染みてきました。短い言葉ですが、私が感じたことについて示したいと思います。

古館且陽さん、一冊の本との出会い、幾度となく読み返し、無意識の自己を意識する喜びを感じ、著者や作品と対話を繰り返している。そうした新たな気づきは、何気ない日々の中にも広がっている。このような時間を大切にしてください。

長龍佑さん、読書を通じて認知症になった祖母を重ね合わせて考え、接し方や心の変化が手に取るように伝わってきました。心を通わせることの大切さ、このことを心の底から感じ、行動としても表れています。この本との出会いを一生の宝として、これからも歩んでください。

北嶋弥那子さん、小学生の頃から描き続けた「本作り」への夢、一方で心の葛藤、その決着に決定的な影響を与えた本との出会い、図書館や編集者のもとに向向いての感動、決意、その心の動きがストリートに伝わってきました。

高尾美結さん、ありきたりの日常の中の理解できないこと、そのようなことに様々な考えを巡らし、読書を通してさらに別角度からも考えています。思考の深さを感じました。

河野滯花さん、自閉症について、読書を通じて様々な思考を巡らし、その中でもほんとうに大切なことは「知ろうとする努力」。決意のみならず、メッセージと感じました。

この八作品以外の体験記、いずれにも感動しました。これから人生においても、様々な出来事があることでしょう。どのような状況にあっても、読書を通してじっくり物事を考える。このような時間を大切に、自分の心に素直にしなやかに生きていってほしいと思います。

読書体験による変容

全国高等学校長協会

小林正人

読書は疑似体験、追体験とそれによる読み手の変容が要であると思っています。今回の中央入賞候補作品についてもこれを中心に読ませていただきます。

文部科学大臣賞となった久保田琉仁さんの『九百三グラムの命をみつめる旅』はとても優れた作品でした。この本をきっかけに久保田さんは自分が生まれ育った石垣島の新生児特定集中治療室がある総合病院を訪れます。七百六十四グラムで生まれた貴陽君は亡くなり九百三グラムで生まれた自分は今でも生きています。保育器の中で懸命に生きている新生児。それを二十四時間体制で見守り治療に当たる先生や看護師。室外から見守りしかない家族。皆が小さな命に最大の愛を注ぎ接し祈っている様子が端正な筆致で書かれています。日本最南端の総合病院がこういう病院であることもこの文章を通じて知ることができました。石垣島周辺の海、空、蟬の鳴き声全てが生身のゲニウス・ロキ（地霊）たりえているように感じられました。

全国高等学校長協会賞の中野光志さん『死に関わる様々な意匠』は題名からも評論志向をうかがわせ、思考が次から次へと展開する作品で評価が割れやすい傾向の内容でした。死に一人称の死は

存在せず、二人称と三人称の死があるとの認識。冒頭のサッカーの試合経歴談は結びでも生きています。

同賞杉原翔太さんの『言葉』の海』はこなれた文章で言葉への興味がよく伝わってきます。「辞書は読むものだ」以外にも辞書を自分なりに定義しているところが評価できます。紙の辞書の利点もそのとおりの思わせませす。審査員全員から評価を集めたのも首肯できます。

以下の5編が一ツ橋文芸教育振興会賞となりました。古館且陽さんの『きのう、隣人に語りかけたこと』は読書の醍醐味そのものを語ってくれていました。六年も繰り返し返し毎年のように読んでいつの間にか「銃口」が心の動きを測るものさしになつたといえます。高校二年生でこのような読書体験をしている人はそういないでしょう。今後どのように読みが変容してゆくのか追いかけてください。

長龍佑さんの『心を通わせる』は認知症の祖母とのこれまでの交流を吐露しながら、この本と出会ったことで祖母との関わり方が変化してゆくことを予感させる内容です。介護というような現在の社会問題が取り上げられている例は、実は今回

の選考では少数でした。

北嶋弥那子さんの『推敲を重ねた「本作り」への夢』はNHKの朝ドラでも題材となった雑誌編集者に関する文章です。中学生の頃から意識し始めた雑誌編集への夢に向かって歩もうとする純粋な気持ち清々しく書かれています。

高尾美結さんの『私たちが理解できないことについて』は自分が感じた「違和感」からの深い思索が印象的です。皮肉も効いた格調高い文章ですが、もう少し平易な表現の方がよかつたかもしれません。

河野澗花さんの『知ろうとする努力』は未だに誤解が多い自閉症の障がいを持つ実兄との交流を書きながら自分の将来の夢を書きます。高校一年生での受賞は大いに評価したいと思います。

全国から九万六千点を超える応募があり、また各都道府県で選ばれたの中央選考作品ということ、どの作品も読みごたえがありました。選考は大激戦であったことを最後に付け加えさせていただきます。

第38回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

【優良賞】 39編

青森県	私立	青森明の星高等学校	二年	根津 葵	本当の支援の先に見えるもの
岩手県	県立	花巻北高等学校	二年	佐々木 晴	九十だおんなあ
宮城県	県立	仙台二華高等学校	一年	今野菜那	生死
秋田県	県立	大館桂桜高等学校	一年	北林詩野	友だち力
山形県	県立	米沢興譲館高等学校	二年	岩松里奈	「完璧」や「普通」の価値
福島県	県立	会津高等学校	二年	大竹なぎ	「戦争」と向き合った夏
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	深谷友香	自分の中の他者
群馬県	私立	共愛学園高等学校	三年	佐藤文音	生き抜くこと
埼玉県	私立	星野高等学校	三年	齋藤瑞貴	共に生きること
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	宮城美月	画面の向こう側
東京都	私立	白百合学園高等学校	二年	金子瑞花	未来を開く問いの答えを求めて
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	稲垣友梨	人の役に立つ生き方
新潟県	県立	長岡高等学校	三年	齋藤淑人	私の再発見
富山県	県立	南砺福光高等学校	二年	川田優華	『うまくいっている人の考え方』
山梨県	県立	北杜高等学校	二年	興水華奈	捉え方を変えるだけで
長野県	私立	松本第一高等学校	一年	中村綾花	「負の史実」と向き合う
岐阜県	県立	岐阜県立揖斐特別支援学校高等部	一年	安田真以香	個性を輝かせるために
静岡県	私立	静岡雙葉高等学校	三年	石上 恵	一つの人生、日常に思いを馳せる
愛知県	私立	椋山女学園高等学校	三年	齋藤まりの	自分を愛するということ。
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	二年	間瀬萌々子	声無き声
滋賀県	県立	水口東高等学校	二年	栢木桃花	命の為に出来ること
京都府	府立	西乙訓高等学校	二年	田中紅実	言葉の力
大阪府	国立	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	二年	小路百香	わが思考、すべてこの中にあり
奈良県	県立	橿原高等学校	一年	大木のぞみ	五彩の虹を願い今を共に
鳥取県	県立	米子東高等学校	一年	北村藍子	母からのギフト

島根県	県立	益田翔陽高等学校	一年	新田喬花	命をつなく言葉
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	一年	末長真理	強く生きる
広島県	市立	広島市立沼田高等学校	二年	谷口礼奈	夏の半券
山口県	県立	徳山高等学校	二年	近藤優歩	甲子園の力
徳島県	県立	名西高等学校	二年	樋口佳須美	繋がり
香川県	県立	坂出高等学校	二年	丸山心桜	自分と向き合うお茶の時間
愛媛県	県立	宇和高等学校	三年	井上遥奈	もしかしたらの光
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	麻植梨緒	変わらないもの
福岡県	県立	東筑高等学校	一年	野口明日香	「博士」と「数学」との出会いとこれからの私
長崎県	県立	猶興館高等学校	二年	今村翔吾	介護
熊本県	県立	熊本高等学校	一年	大友美空	才能と生きること
大分県	県立	佐伯鶴城高等学校	三年	堀口裕貴	中也と出会う旅
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	二年	宮園理帆	薔薇色の君へ
沖縄県	県立	那覇高等学校	二年	大城幸弥	気づく心

【入選】

188編（各県の校名・氏名は五十音順）

北海道	道立	旭川北高等学校	二年	片山葉月	命を食べるということ
	道立	旭川北高等学校	二年	関 花衣	辞書について
	道立	札幌国際情報高等学校	二年	ろりんカーリック信幸	大空を鳥のように
	道立	札幌月寒高等学校	一年	穂田駿佑	ディストピアに精神統一を
青森県	県立	八戸高等学校	一年	藤田海羽	私の恩人
	県立	八戸高等学校	一年	水石萌菜	私の生きる意義
	県立	八戸高等学校	二年	野田頭咲希	犯罪の手前で踏みとどまるために
岩手県	県立	八戸高等学校	二年	松村美来	人間としての強さ
	県立	一関第一高等学校	二年	千田愛海	向き合いたいもの
	県立	盛岡工業高等学校	三年	熊谷 萌	顔晴るためにすべきこと
	県立	盛岡第三高等学校	二年	金子愛佳	向き合う強さ
	県立	盛岡第三高等学校	二年	國崎萌子	何も写さないカメラ
宮城県	県立	白石高等学校	二年	岸野愛菜	普通を生きること

	県立	仙台三桜高等学校	二年	高橋侑生	心を反映させる
	県立	仙台第二高等学校	二年	小山麻妃	誰かのために死ぬ気で走る
秋田県	県立	仙台南高等学校	二年	高橋怜那	自分の道
	県立	秋田西高等学校	一年	岩谷ゆい	関わりをもつ
	県立	大館桂桜高等学校	一年	秋田郁弥	『ふたご』が教えてくれた本当の絆
	県立	大館桂桜高等学校	一年	安部詩音	一日の価値
	県立	十和田高等学校	一年	藤田葉月	心が通い合うキセキ
山形県	県立	上山明新館高等学校	一年	寒河江優菜	幸せになる生き方
	県立	新庄南高等学校	一年	土田朱莉	ともに生きる
	県立	新庄南高等学校校金山校	二年	高橋佳奈子	みんな違ってみんないい
	市立	山形市立商業高等学校	二年	谷川真琴	人の目に映る自分
福島県	県立	会津高等学校	二年	梅宮悠悟	一冊の本から学んだこと
	県立	安積黎明高等学校	一年	三浦舜平	Knock The door
	私立	郡山女子大学附属高等学校	三年	久保香子	外村青年という鏡を通した自分
	県立	須賀川高等学校	一年	長谷川裕奈	嘘がもたらしてくれる幸せ。
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	内田賜恵	幸せについて
	県立	水戸第一高等学校	二年	小栗舞桜	「悲しみ」を迎えないために
	私立	茗溪学園高等学校	一年	小出 暖	繰り返し返すもの、変わりゆくもの
	私立	茗溪学園高等学校	一年	戸部遥太	「考える」ということについて考える
栃木県	県立	宇都宮高等学校	一年	土屋皓平	『日本のいちばん長い日』を読んで
	県立	宇都宮女子高等学校	二年	齋藤舞喜	そのいのちを、次へ。
	県立	宇都宮東高等学校	二年	根本桃果	煌めき
群馬県	県立	真岡女子高等学校	二年	澤辺美佳	天国への手紙
	県立	高崎健康福祉大学高崎高等学校	二年	榎本満里奈	家族のために
	県立	高崎女子高等学校	二年	中嶋理名	アドラーから学んだ事
埼玉県	県立	前橋女子高等学校	二年	保坂恭子	夢へいざなう人と言葉と
	私立	秋草学園高等学校	二年	元木しおり	私と組織
	私立	秋草学園高等学校	二年	吉澤美羽	私を変えた本
	私立	星野高等学校	一年	野城知里	変化する想い
	私立	星野高等学校	三年	田中美穂	三十一文字と共に
	私立	星野高等学校	三年	田中美穂	モチベーションを持って未来を創造する

千葉県	県立	国分高等学校	二年	増田さりあ	絶望から救ってくれた本
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	齋藤光貴	小学生の頃の夢
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	伊東碧海	有害なのか？
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	徳倉亜依	挫折の先にある幸せ
東京都	私立	女子学院高等学校	一年	伏屋祐希	空の下で
	私立	白百合学園高等学校	三年	平山 薫	いただきます
	国立	筑波大学附属桐が丘特別支援学校高等部	一年	杉本真知子	「気の毒だ」と思うこと
	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	二年	小野遥夏	「祈る」ということ
神奈川県	市立	川崎市立川崎総合科学高等学校	一年	百瀬 楓	証言者
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	佐藤ひより	まずは自分から
	私立	聖ヨゼフ学園高等学校	二年	西村友希	何十年でも読みたい本
	県立	平塚中等教育学校	四年	堀江里菜	きっかけ
新潟県	私立	第一学院高等学校新潟キャンパス	三年	星山玲奈	前を向いて
	県立	高田北城高等学校	一年	石橋絢子	不正義の平和
	私立	帝京長岡高等学校	二年	前田操紀	わたしの母はフィリピン人
	県立	新潟高等学校	二年	高橋まりあ	五彩の虹を掛ける
富山県	県立	砺波高等学校	二年	掃部裕暉	悩んだその先に
	県立	富山商業高等学校	二年	田中映里奈	繋ぐ命・繋がる出会い
	県立	富山中部高等学校	一年	神谷夏花	今この瞬間を精一杯生きる
	県立	富山北部高等学校	二年	梅澤杏樹	思い出と共に生きる
石川県	国立	金沢大学附属高等学校	一年	小坂桃香	花と、歪んだコンタクトレンズ
	国立	金沢大学附属高等学校	一年	紺谷真里	夢の叶え方
	国立	金沢大学附属高等学校	二年	北野真侑子	文学を、生きる
	県立	金沢二水高等学校	一年	坂口 歩	お父さん
福井県	県立	羽水高等学校	二年	青山櫻子	『かがみの孤城』を読んで
	県立	金津高等学校	三年	稲木瑠亜	二重のやさしさ
	県立	高志高等学校	三年	北嶋紀子	文系学部について
	県立	藤島高等学校	一年	細川詩月	喜びを求めて
山梨県	県立	甲府東高等学校	一年	戸島瑞稀	つなげていって
	県立	甲府南高等学校	一年	横尾颯人	持ち続けたい気持ち

	県立	都留高等学校	二年	福田優香	全ての子どもに小さな望みを
	私立	山梨英和高等学校	一年	荻野ミチル	私にとつての救い
長野県	県立	蘇南高等学校	二年	遠山晏菜	カラフルな世界
	私立	松本第一高等学校	一年	坂井ひな	教育はお金か
	私立	松本第一高等学校	二年	腰原亜実	幸福とは貢献感
	私立	松本第一高等学校	二年	小林蓮	人生の目標に復讐という名を
岐阜県	県立	大垣北高等学校	二年	森 友汰	人生という森を進み続ける
	県立	大垣東高等学校	二年	宮堂未彩	平和のために
	県立	岐阜北高等学校	二年	播磨佑亮	炊き込みご飯
	県立	岐阜北高等学校	二年	水谷百花	玉子の外の世界は
静岡県	私立	静岡雙葉高等学校	三年	佐藤涼香	「解る」を求めて
	市立	浜松市立高等学校	一年	三上桃果	本の可能性
	県立	浜松西高等学校	二年	近藤 廉	二人の私に惑わされて
愛知県	私立	不二聖心女子学院高等学校	二年	石橋聡子	自分を見つめて生きる
	私立	愛知淑徳高等学校	二年	山口柚実	お茶を始める前よりも
	県立	一宮高等学校	二年	福村優葵	森を、歩く
	国立	豊田工業高等専門学校	二年	上田悠月	選択と道
三重県	県立	豊田西高等学校	一年	白柿晴花	今、此処にいること
	私立	暁高等学校	一年	伊藤希美	幸せな選択
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	西口莉央	死ぬ時こそ自分らしく
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	吉田知未	心を形にする
滋賀県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	二年	辻 彩乃	わたしの「キッチン」
	県立	安曇川高等学校	一年	上尾志乃	輝く今と人生の定義
	県立	草津東高等学校	二年	新家有莉	特別な今
	県立	高島高等学校	三年	辻 千夏	踏み出す一歩
京都府	県立	水口東高等学校	一年	森 初菜	磨いていきたい力
	私立	京都女子高等学校	一年	上田朋果	心をひらく
	私立	京都女子高等学校	一年	黒田瑞穂	私が青春を懸けた、吹部に寄せて
	府立	洛西高等学校	一年	一島秀汰	森は海の恋人
	私立	立命館高等学校	二年	小川 萌	生きるとは何か

大阪府	国立	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	二年	織茂真白	「かつこいい私」になるために
	国立	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	二年	水谷佳央	戦争から得た平和への道
	市立	大阪市立高等学校	一年	平野良佳	自分を大切にすること
	府立	河南高等学校	一年	丸田大夢	フィリピン留学で学んだ自立心とコミュニケーションの取り方について
兵庫県	私立	小林聖心女子学院高等学校	二年	林 絵莉花	バナナの背景に
	私立	賢明女子学院高等学校	一年	告 優月	贈りもののいのち
	私立	星陵高等学校	一年	海老原瑠人	学ぶということ
	私立	姫路西高等学校	二年	濱野由菜	みんなの音
奈良県	私立	畝傍高等学校	一年	吉永衣織	大切なこと
	私立	橿原高等学校	二年	安東奈瑠映	苦悩を突き抜けて
	私立	青翔高等学校	二年	松本香乃美	世界は平和になる
	私立	青翔高等学校	二年	水野友晴	気づき
和歌山県	私立	近畿大学附属和歌山高等学校	二年	間藤千草	一人じゃない
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	金谷ひまり	一期一会
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	山崎麻菜美	国を超えた戦争の教え
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	木田 花	世界中をとくべつな場所に
鳥取県	私立	青翔開智高等学校	二年	内田奏杜	「種」と自己
	私立	鳥取湖陵高等学校	二年	土佐一葉	気づきから生まれた勇氣
	私立	米子北高等学校	二年	青尾海咲	人間関係について
	私立	米子西高等学校	二年	本田萌夏	自分にしか描けない世界
島根県	私立	出雲高等学校	一年	今若龍馬	決意
	私立	益田翔陽高等学校	二年	斎藤采花	かけがえのない人
	私立	松江南高等学校	二年	太田めい	オハナ
岡山県	私立	松江南高等学校	二年	坪内ちひろ	終わりのない人生
	私立	岡山朝日高等学校	二年	中山 萌	「いま」を肯定する
	私立	岡山東商業高等学校	二年	岸上汰颯	教訓を生かすために
	私立	笠岡高等学校	二年	池野柚香	かけがえのないガラクタ
	私立	倉敷天城高等学校	一年	楠 琉々華	摺んだ宝物
広島県	私立	広島市立沼田高等学校	二年	平田さくら	「知らんぷり」はできない
	私立	広島文教女子大学附属高等学校	一年	福原 萌	オリジナル発達との出会い

	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	一年	荒井 優	嫌いな本が教えてくれる
	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	二年	斉藤穂香	ヒロシマから伝えたいこと
山口県	県立	熊毛南高等学校	二年	晝田 望	なりたい自分
	県立	下関西高等学校	一年	川瀬百合子	作者からのメッセージ
	県立	下関西高等学校	一年	藤永祐利	なぜ神は沈黙したままなのか
	県立	徳山高等学校	二年	藤本陽生	生き方に迷ったら
徳島県	県立	城東高等学校	一年	福永航大	手紙屋に学んだこと
	県立	徳島北高等学校	二年	富士純美詠	「難民問題」と向き合う
	私立	徳島文理高等学校	二年	谷本智海	博士が愛した数式のように
	県立	富岡東高等学校	二年	中島日菜子	目指す
香川県	県立	高松高等学校	一年	桐谷陽菜	最後に診断を下すのは
	県立	高松商業高等学校	二年	長谷川珠希	社会で求められる人になるために
	県立	丸亀高等学校	一年	岡崎 藍	教室の私へ
	県立	丸亀高等学校	二年	大平拓真	「報道」の意味
愛媛県	県立	松山北高等学校	二年	井場木才紀	私の背中を押した『キッチン』
	県立	松山西中等教育学校	四年	岡田侑楽	炎天の中で
	県立	松山東高等学校	二年	沖田英里	終わることのない答え探しを今日も私は。
	県立	三島高等学校	三年	河端朝香	小さな世界と私
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	野村千咲	魔女になるために
	私立	高知学芸高等学校	二年	三浦楓太郎	自分が「自分」になるまでに
	県立	高知農業高等学校	三年	門脇ゆめ	父の背中へ家族のあり方へ
	県立	高知農業高等学校	三年	上池大智	豊かさを持った成長
福岡県	県立	小倉西高等学校	一年	斎藤めぐみ	和室で過ごす『今』
	県立	修猷館高等学校	二年	陣林貞紀	禅-ZEN-×日本の女子高校生
	県立	筑紫丘高等学校	一年	金子奈央	私の当たり前
	県立	門司大翔館高等学校	二年	菊池 鈴	時間の大切さ
佐賀県	県立	小城高等学校	二年	大坪結里加	日本史ってオモシロイ!!
	私立	弘学館高等学校	一年	星下笑瑠	親から子へ受け継ぐことは…
	県立	佐賀北高等学校	二年	牧 一徹	空を仰いで
	県立	鳥栖高等学校	二年	橋本咲歩	十六歳

長崎県	県立 壹岐高等学校	一年	山本ひかる	大事なものの
	県立 佐世保西高等学校	一年	古市 滯	人生の中の選択
	県立 長崎南高等学校	二年	宮地航太郎	相手を考える
	県立 猶興館高等学校	二年	黒木綾乃	本当の意味での平等とは
熊本県	県立 熊本高等学校	一年	角田景織子	「自分」を生きる
	国立 熊本高等専門学校熊本キャンパス	二年	上土井 茜	伝える
	私立 熊本マリスト学園高等学校	二年	糸永 愛	「私的生活」を探して
	私立 尚綱高等学校	三年	鶴田菜月	押された背中
大分県	県立 大分上野丘高等学校	二年	三嶋愛子	ライ麦畑の捕まえ手
	県立 大分商業高等学校	三年	小川璃子	努力すること 夢をかなえること
	県立 杵築高等学校	二年	幸松実央	おばあちゃんに会いたい
	県立 芸術緑丘高等学校	一年	藤内花恋	音を求めて
宮崎県	私立 聖心ウルスラ学園聡明中学校高等部	三年	柏田紗英	装備するのはかつての私
	私立 宮崎学園高等学校	三年	稗苗かのん	さよならの行く先
	県立 宮崎北高等学校	一年	齊藤瑠莉	ありのまま生きるということ
	県立 宮崎西高等学校	二年	渡邊日楽	闇に堕ちた先に
鹿児島県	私立 鹿児島第一高等学校	二年	末永里咲	おぼろげな灯を見詰めて
	県立 加治木高等学校	三年	深草混雅	「わからない」の壁に挑む
	県立 錦江湾高等学校	三年	長山そら	自分の「かくしごと」が人のためになる
	私立 樟南高等学校	二年	藤山諒子	あなたの温もりを
沖縄県	県立 開邦高等学校	一年	野村南実	死の恐怖
	県立 向陽高等学校	一年	大村加奈子	message
	県立 向陽高等学校	二年	島袋凜々	私の大嫌いな、でも役に立つ世界の共通言語
	県立 知念高等学校	三年	上江洲聖奈	私の目指す道

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。(2月中旬予定)
<http://www.hitotsubashi-bks.jp>